

【みんなへの手紙】

2001. 2. 13

川田 剛

「ともに組んでやっていく」場所に！

はじめに

「むくどりの家」が誕生してから今年の6月で19年経ちます。そう聞いてどんな感じがしますか？ 皆さんを利用した長さもかかわりの持ちかたもひとりひとり違いますから、感じていることも違うに違いない（ヘンな言い方）。それぞれに感じたり考えたりしている率直なところを、ぜひじっくり聞かせてほしいと思います。

「むくどり」の19年の歩みは横浜での精神障害者の地域作業所の歩みと重なっています。横浜以外も含めると20数年です。私は「むくどり」も含めて、「作業所」そのものがいま一つの大きな転機にさしかかっていると切実に感じています。現場にいる者の一人として、また社会のいろいろな動きや変化もこのところ急で、その事を痛感するのです。

さて、「むくどりの家」という一つの場のあり方について、私はこれから皆さんメンバーの人たちといっしょに考えいろいろ話し合って新しい作業所のあり方を探っていきたいと思っています。そのためにこれから、私や他のスタッフ、運営委員会の考え方とか取り巻くいろいろな情報をお伝えしていくつもりです。なんといってもメンバーとスタッフの協働（一緒にはたらく）、あるいは協同（一緒にやっていく）で場づくりを進めていきたいのです。私がそのような思いを強く持っているのはなぜか、今日はそのところを文章にすることでなんとかお伝えしたいと考え、ペンを持ちました。読んでいただければうれしいです。

私がいまこの仕事をしているのは…

私は「むくどりの家」がオープンして3年目の1985年、29才の時に職員としてむくどりへ来ました。それ以前は運営委員としてかかわっていましたが職員ではありませんでした。横浜市の保健所でケースワーカーをしていました。

保健所で個々の相談に応じる仕事の中で、「医療につなげる」という仕事が多くありました。病院までいっしょに行き、入院が決まるとたいていは病棟への扉を開けるカギの音、続いて重たい扉がガチャーンと閉まる音とともに向こうとこちらに別れました。再び地域でお会いすることの出来た人ももちろんいましたが、それっきりになってしまう人も少なくありませんでした。その人たちのことを思い出すと複雑な気持になります。

そして、地域で当事者や家族の人たちをサポートするはたらきがあまりにも弱すぎるというか、ほとんどないことがそうした長期入院につながっていることもみてきました。病いや障害をもった人たちには治療とか訓練という形で大変な「努力」を強いながら、社会の側は何も努力をしていないどころか切り捨てているのではないか、これでは片手落ち

もはなはだしい…と疑問を持ちました。

一方、保健所で当時月1~2回開かれていた患者会(現在の「生活教室」)では、人間的なふれあいがあり、わたし自身もっとも楽しくやりがいを感じた仕事でした。

そんな中で1982年ごろに始まった横浜の地域作業所づくりの動きに私は期待を持ち、すんでかかわりを持ちました。毎日開きしかも専用の場所もある作業所なら、「生活教室」以上に、日々の生活や様々な活動の中でメンバーの人たちが力と元気をたくわえることが出来るのではないか。社会を変えていくきっかけも作れるのではないか。いろんな意味で「地域の中での拠点」になれるのではないか——若かった私は期待を抱きました。

転職したのは、人間関係に弱く適応力が乏しかったことなど、もちろん他の理由もありましたが、想いとしては上に書いたような気持を持って「むくどり」へ来たのでした。

そして同時に、私は作業所をいわゆる「施設」にしたくないと最初から思っていました。

「施設」にしたくない～私の発想の出発点～

ここで私が「施設」というのは、次のような事を意味しています。

①「あらゆる指導をし面倒を見る」職員と「指導され、面倒をみてもらう」利用者とがはっきり分けられている場所

②周り(地域)とのかかわりが少なく閉鎖的で風通しのよくない場所

もちろん実際にある「施設」の中には、私がここで言っているようなものとは全く違う考え方ややり方で運営されている素晴らしい施設がたくさんありますし、近年は多くの施設がこういった問題点を自覚して何とか克服しようとがんばっています。でも、①や②のような固定した関係、閉じた場所になってしまふ危険性を「施設」が持っている面は確実にあると思うのです。

なぜ私は以前からそのことを大事なポイントとして意識していたか。いろいろ思い返していくと、「妹」とのかかわりがまず思い浮かびます。少し自分の小さい頃からることを書かせてもらいますので、付き合って下さい。

私と三つ違いの妹は脳性小児マヒ(CP)という障害のため、手と足と言語に(それぞれは比較的軽度の)機能的なハンディがあります。子どもの頃、家族で出かけるときは妹の速度にあわせるのでいつもゆっくりゆっくり歩かなくてはなりませんでした。「なぜ、ウチだけのろのろ歩かなくてはならないんだろう…」私は不満でした。正直に言うと何かみっともない氣すらしました。妹が通っていた養護学校の行事に親が行くとき一緒にと誘われても私は行きたがらず、留守番することが多かったです。ある時、私は妹に対し、兄貴カゼをふかしてお説教をしました。「身体に障害があるからといってへこたれるな。気持をしっかり持ってがんばれ」と。あの三重苦のヘレン・ケラーを引き合いにも出しました。妹は「何もわかってない」と猛烈に反発しました。私は反発の意味がわからず、とまどいました。

その後、私は大学に入ってまもなく 18、9 才の頃、自分の人生の針路に迷うことになります。授業にもクラブにもついて行けず、自分が何をどうしてよいかさっぱりわからなくなり途方に暮れ、毎日ボウ然と街をうろうろしたり、ひたすら映画ばかり見て過ごしたりしました。『生きがいについて』という本のページを必死に追い、お守りのように枕もとに置いて寝たのもこのころです。そうこうするうちにいくつかの出会いがあり、それをきっかけにしながら右に行ったり左に行ったりのジグザグ模様を描きながら現在に至るのですが、自分にとって大切な出会いをキヤッヂすることが出来たのは、私の場合はやはり妹のことがあったからだと思います。その意味でまさに「妹サマサマ」です。わかっている気になって得意になって説教を垂れた自分を「穴があったら入れたい」。でも、大きな勉強をさせてもらいました。ちなみに、その後妹は高校から普通校に進み、今は会社員をしています。その時々に人知れぬ苦労があるようです。

20 才前後の頃、私はボランティアで車イスを押しながらあちこちに出かけ、いろいろな人と知り合い、生活にハリを見出し元気になりました。そして、「ゆっくり歩くのは心地いいなあ」と感じている自分に気が付きました。立場は違っても、互いにやりとりしながらやっていく事の楽しさも知りました。

一緒にやりたい

私がどんな人間か、どうして今ここで仕事をしているのか知ってもらいたい一心で、自分のことを書かせていただきました。かけあしだったのでお分かりにくかったでしょうか。それでも何か感じていただけただしようか？

妹から、あるいはその後お付き合いさせていただいている車イスの人たちから、私はたくさんの大切な気づきをいただきました。癒しを得ました。生きるという事、社会のあり方について考えるきっかけも与えられました。それから、自分も何かの役に立ちたいと思うこともできました。私にとって「障害」のことを考えたり、障害を持った人にかかわるということはそういうことを意味します。誤解を恐れずにひとことで云うなら「ヒミツの宝ものがいっぱい隠されている場所のそばを通る」こと。ボランティアが仕事になり、障害の種別が「精神」に変わっても、私にとっての出発点は同じです。実際この仕事をする中で、大変さもあるけれど、他では得られない楽しさと大事な気づきを感じさせてもらっていました。

と同時に、私は自分の危うさを感じます。かつて妹に対してそうだったように、相手のことをついわかった気になってしまふのがコワイ。私も小さな一人の人間として悩みやしんどさはいろいろとあります。落ち込むことも投げやりになることもしょっちゅうです。だけれども、精神の病い(障害)を持って生きることのしんどさや薬をずっと飲み続けるつらさ、病院体験の重さや病院に長くいる人がどんな気持でいるのかは、とうてい私にはわからない。その立場になったことがない私にはわかるはずがない。そのことを肝に銘じて

おきたいと思います。私にできることがあるとすれば、「わからうとすること」だけです。

上のことを逆にいえば、当事者だからできる(にしかできない)仕事があるということになります。そうなのです！　私が「むくどり談話室」を思いつき、まずはメンバーの人に担当していただきたいと希望した発想のもとはそれでした。メンバーとスタッフが力を合わせることによって、病院や家からなかなか出られない人たちとつながる何かのはたらきが「むくどり」を拠点にして出来るのではないか…。

先日、保健所の家族教室に呼ばれた時に重久さんが話されていました。「今の世の中はスピードが速すぎます。だから、ワンクッションが必要です。そばにいて見ててくれるだけでいいのです。そういうことのある社会ならば、病気になる人も少なくなるのではないかでしょうか…」。私はこの言葉に大いに共感を持ちます。周囲の「普通」の人たちが、疲れを癒したり楽になったり、生きていく中身が豊かになったり…「作業所」はそんな場所になる可能性をも間違ひなく持っていると思うのです。

メンバーとスタッフの関係を、いつでも自由に形を変えられるやわらか～い関係にしたいと思います。スタッフ、あるいは健常者といわれる私たちが組み立てた船にメンバーが乗っかかるのではなく、一緒に船を組み立てカジを取って荒海を進んでいきたい。立場は違っても…というより違いを活かし合いながら。それが私の描く「地域作業所憲法第一条」です。そこに近づくためには、今までのやり方にこだわらず見直していくことも必要でしょう。お互いに一緒にやることに慣れていないし、口で言うようには簡単にいかない事も多くあるでしょう。世の中の「普通」のもののみ方、考え方を疑ったりひっくり返したりしなくてはならない事もあるかもしれません。でも、一緒にガップリ四つに組んでやっていく中にこそ何かが生まれる。希望がある。私はひそかに信じています。

長い文章を最後まで読んでくださってどうも有難うございました。何でもいいですから皆さんの感想や考えを聞かせてください。キリンの首で待っています。